所謂出血性鼻茸ノ十二例ニ就テ

T. Matsuyama: Über 12 Fällen von sog. blutenden Polypen.

静岡県島田町共生病院耳鼻咽喉科

松 山 武 郎

一. 緒 言

1893年シャーデワルトガ鼻中隔ニ發生セン出血性鼻茸トシテ、初メテ、其3例ヲ報告セン以來、之ガ文献ハ枚舉ニ遑ナキ所ナリ。

今ヤ本茸腫ハ獨リ中隔ノミナラズ、下甲介、中甲介、下鼻道、中鼻道等ヨリモ發生スル事ノ知ラルルニ及ビ、鼻腔出血性茸腫(チテリイ、ランゲ)、鼻腔粘膜出血性茸(カッツ)等ノ名稱ノ提案アリ。且ツ又鼻腔ノミナラズ、副鼻腔ニモ發生スルモノナル事分明シ、バローヴィツハ單ニ出血性鼻茸ト呼稱シテ發生部位ヲ冠セザルヲ至當トセリ。

余ハ東京市立築地病院、横須賀海軍共済組合病院、名古屋醫科大學及ビ現職ノ共生病院勤務ノ既往4年間ノ耳鼻科臨牀ニ於テ12例ノ出血性鼻茸ヲ經驗センヲ以テ、之ガ臨牀症狀並ニ組織學的所見ニ就キ比較並ニ綜合的觀察ヲ試ミ、多少ノ知見ヲ得タルヲ以テ、茲ニ報告セントス。

二. 症 例

第一例 島根某、26歳男子、事務員。

家族歴並ニ既往歴。特記スベキモノナシ。

現病歴。約2ヶ年前兩側ノ鼻閉ヲ主訴トシテ

某醫ヲ訪レ、鼻茸ノ切除ヲ受ケ、一時輕快セシモ昨年初メヨリ再ビ左側鼻閉ヲ來タシ且ツ時々衄血アリ。昭和8年2月10日初診。

局所々見。左右鼻腔粘膜ハ一般ニ稍ニ萎縮乾燥シ、中鼻道其他各所ニ僅少ノ痂皮ヲ附着ス。左側ニ於テハ、下甲介ト中隔トノ間ニ小指頭大ヨリ小豆大ニ亘ル數個ノ鼻茸ヲ認メ、其表面ハ浮腫狀滑澤ニシテ暗赤色ヲ呈シ、膠狀軟ニシテ探診ニヨリ容易ニ出血スルモ辛フジテ其發生部位ガ中隔結節ナル事ヲ確メ得タリ。

診斷並ニ處置。慢性乾燥性鼻炎兼左中隔多發性鼻茸ナル診斷ノ下ニ、2月23日中隔粘膜ノ一部ト共ニ多發セル鼻腫ヲ一舉ニ摘出セリ。茸腫ハ大小8個ヨリ成リ分葉狀ヲ呈シ、所々ニ凝血塊ヲ附着ス。術後多少ノ出血ヲ見タルモ、創面ハ順調ノ經過ヲ以テ治癒セリ。

組織學的所見。茸腫ノ表面ハ多層圓柱上皮ニヨリテ被覆セラレ、全體トシテ、血管ニ富メル纖維腫ノ像ヲ呈シ、粘膜下ニハ圓形細胞ノ浸潤稍ニ強ク、且ツ所々ニ肥胖細胞ノ遊出ヲ見ル。血管壁ノ多クハ單層ニシテ血液ヲ充滿セルモノ多ク、出血竈モ亦所々ニ點在ス。血管周圍ニハ「ヘモデリン」ノ沈着アリ。

第二例 田村某、32歳男子、官吏。

家族歴上特記スベキモノナク、18歳ノ時、左上顎竇炎ノ根治手術ヲ受ケタル外著患ヲ知ラズ。

現病歴。本年當初ヨリ左鼻閉及ビ鼻出血アリ。1月下旬ヨリ増悪ノ兆アリシモ放置セシニ3月3日換鼻ノ際、左前鼻孔ヨリ拇指頭大ノ石塊(鼻石?)排出セラレ多量ノ出血ヲ伴フ。依テ翌日ナル昭和8年3月4日我外來ニ需診。

局所々見。左鼻腔ヲ檢スルニ、下甲介稍ミ肥大シ、中鼻道ニハ粘液性膿汁ノ滯溜ヲ認メ、且ツ中甲介前端ハ大豆大ノ有莖性腫瘍ヲ見ル。腫瘍ノ表面ニハ汚穢赤色ノ痂皮ヲ附着シ觸診スルニ弾力性軟ニシテ容易ニ出血ス。

診断。處置。左再發性上顎竇炎、慢性篩骨蜂巢炎兼左中甲介出血性鼻茸ナル診断ノ下ニ、腫瘍ヲ中甲介前端ト共ニ切除セリ。

組織學的所見。茸腫ノ表面ハ單層圓柱上皮ニ被ハル、モ、表皮ノ脱落シ潰瘍化セシ部アリ。腫瘍基質ハ粗鬆ナル結締織ヨリ成リ、内ニ多數ノ腔洞ヲ認メ、且ツ血管ニ富ム。血管内ニハ血液充實シ、所々ニ出血竈アリ。全視野ヲ通シ圓形細胞ノ浸潤著明ナレドモ粘膜下、血管及ビ出血竈ノ周邊等ニ於テ特ニ強シ。要之、本例ハ肉芽腫ト考フベキ所見ヲ呈セリ。

第三例 萩原某、22歳男子。

家族歴並ニ既往歴上特筆スベキ事項ナシ。

現病歴。約2ヶ月前、何等ノ誘因ナクシテ突然右鼻出血ヲ來タシ、其際患者自身指頭ニテ右鼻腔ヲ觸ル、ニ、腫瘤存セリト云フ。其後2ヶ月ニシテ又相當量ノ鼻出血アリ。爾來前記腫瘤ヲ觸知シ得ザルニ至レルモ、連日出血ヲ見ルニ及ベルヲ以テ昭和8年11月15日需診。

局所々見。右鼻中隔ノ前端ヨリ約1.5cmノ深

サニテ下甲介ト對スル部ニ短キ莖ヲ有スル2個ノ茸腫アリ。1ハ小豆大、他ハ半米粒大ニシテ共ニ膠様軟、暗赤色ヲ呈シ、表面ヨリ容易ニ出血ス。

右出血性中隔鼻茸ナル診断ノ下ニ11月21日、中隔粘膜ノ一部ト共ニ切除ヲ行ヘリ。

組織學的所見。上皮ハ重層扁平上皮ヨリ成リ略々完全ニ腫瘍ヲ被ヘルモ厚薄ニ様ナラズ、粘膜下ニハ粗鬆ナル結締織ヲ認メ、基質中ニハ極メテ多數ノ腔洞ヲ形成ス。該腔洞壁ハ内被細胞ノミヨリ成リ、其或ルモノハ血液ヲ充ス。圓形細胞ノ浸潤ハ強カラズ。一見血管腫ヲ考フベキ像ナリ。

第四例 桑某、68歳男子、教員。

家族歴並ニ既往歴上特記スベキ事項ナシ。

現病歴。昨年9月頃ヨリ左鼻出血アリ。其後鼻閉ヲ覺エ、次デ左鼻腔内ニ腫瘤ヲ觸ル、ニ至ル。放置セシニ漸次増大シテ前鼻孔ヨリ紫赤色ノ腫瘤ノ突出ヲ來タシ、出血ノ頻度漸次加ハレリ。依テ昭和10年1月20日需診ス。

局所々見。左前鼻ハ深紅色浮腫狀ノ腫瘍ヲ以テ閉塞セラレ、觸診ニヨリ容易ニ出血ヲ來タス。探診スルニ表面ハ分葉狀、弾力軟ニシテ中隔キーゼルバハ氏部ヨリ有莖狀ニ發生セルヲ知レリ。右鼻腔ニハ異狀ヲ見ズ。

診断。處置。左中隔出血性鼻茸ト診定、即日型ノ如キ切除ヲ行ヘリ。該茸腫ハ重量1.2g、大サ1.2cm×1.8cm×1.0cmヲ算セリ。

組織學的所見。一言ニシテ云ヘバ血管纖維腫ト稱スベキ變化ニシテ一部ニハ多層扁平上皮、他部ハ結締織性被膜ヲ有シ、粘膜下ニハ出血竈及ビ血色素ノ沈着著明ナリ。基質ハ粗鬆ナル結締織ヨリ成リ「フィブロプラステン」ノ遊出強

ク且ツ中＝多數ノ擴張セル血管ヲ認ム。該血管ノ多クハ空虚ナルモ稀ニハ血液ノ充實セルモノアリ。圓形細胞ノ浸潤ハ一様ニ認メラル、モ概シテ著シカラズ。

第五例 宮田某。21歳男子。

家族歴上特記スベキ事ナク。既往症トシテハ2歳ノ頃ヨリ左鼻漏ヲ訴フル外著患ヲ知ラズ。

現病歴。約1年前ヨリ濃厚ナル鼻汁漏出。左鼻閉並ニ左鼻出血アリ。放置セシニ増悪ノ兆アルヲ以テ昭和9年8月20日需診。

局所所見。左右中鼻道ニハ少量ノ粘液性膿汁ヲ認ムルモ粘膜ノ萎縮。肥厚等ヲ見ズ。左下甲介前端ヨリ有莖嚢大ノ極メテ出血シ易キ茸腫ノ發生アリ。表面ハ浮腫狀ニシテ暗赤色ヲ呈シ。肉芽様ノ感觸ヲ與フ。

左鼓膜前下部ニハ米粒大ノ穿孔存スレドモ中耳腔ハ乾燥ス。

診断。處置。兩慢性上顎。前額竇炎兼左下甲介出血性鼻茸ナル診断ノ下ニ即日茸腫ノ切除ヲ行フ。

組織學の所見。多層扁平上皮ニ被ハレタル極メテ粗鬆ナル結締織ヨリ成ル茸腫ニシテ其結締織ノ一部ハ粘液様變性ヲ來タセルガ如キ觀ヲ呈セリ。全視野ヲ通ジ擴張セル血管ニ富ミ。其一部ハ血液ヲ滿セリ。圓形細胞ノ浸潤ハ比較的輕度ニシテ血管腫ト考フベキモノナリ。

第六例 三好某。26歳女子。

家族歴上特記スベキ事項ナシ。14歳ノ折左脛骨々髓炎ヲ經過セン外著患ヲ知ラズ。23歳ニシテ結婚シ。3歳ナル1女アリ。現在第2回ノ妊娠中ニシテ8ヶ月目ノ終リニ相當セリ。

現病歴。約6週前。左鼻腔内ニ小ナル腫物ノ發生センヲ氣付キタリ。其頃ヨリ時々左鼻出血

アリタリ。放置セシニ該腫物ハ次第ニ増大シ。2週間來。同側鼻呼吸ハ不能トナレリ。依テ9年7月24日需診ス。

局所所見。左鼻腔ハ暗赤色浮腫狀ノ腫瘍ニヨリ全ク充サレ。且ツ該腫瘍ノ一部ハ前鼻孔外ニ突出セリ。探診ニヨリ辛フジテ中隔前端ヨリ發生セルモノナル事ヲ確メ得タルモ中。下甲介等ハ鏡檢シ得ズ。

診断。處置。左中隔出血性鼻茸ナル診断ヲ下シ。初診ノ翌25日。熱蹄係ヲ以テ拇指頭大ノ茸腫ヲ絞斷セリ。茸腫ノ大サハ2.6cm×1.6cm×1.2cmヲ算シ表面ハ平滑ニシテ一様ニ暗赤色ヲ呈シ。一見出血シ易キヲ想ハシメタリ。

組織學の所見。表面ノ一部ハ多層扁平上皮ニ被ハレ。一部ハ結締織性ノ被膜ヨリ成リ。基質ハ纖維腫様構造ヲ有シ。其一部ハ粘液様變化ニ陥リ内ニ極メテ多數ノ新生血管ヲ認ム。該血管ノ殆ンド總テハ血液ヲ充シ。其周邊ニハ多少ノ圓形細胞ノ浸潤アリ。出血竈モ亦所々ニ點在ス。出血竈ノ多クハ比較的新鮮ナルモノハ如ク。血色素ノ沈着ハ認メラレズ。要之本例ハ血管纖維腫ト考フベキモノナリ。

第七例 杉野某。44歳女子。

家族歴。既往歴上特記スベキモノナシ。

現病歴。約4ヶ月前ヨリ。頭痛。鼻閉。右鼻出血アリ。放置セシニ出血量漸次増加ノ兆アリ。某醫ヲ訪レシニ惡性腫瘍ト斷定セラレタルニ驚キ8年11月29日需診。

局所所見。左鼻腔ニハ病變ヲ認メズ。右前鼻ハ示指頭大紫赤色柔軟ナル腫瘍ニヨリテ充滿セラレ。探診スルニ不動性ニシテ中隔トハ癒着ナキヲ以テ側壁ヨリ發生セルモノハ如キモ。出血ノ爲メ其詳細ハ不明ナリ。後鼻鏡檢查ニヨリ該

腫瘍ヲ鏡檢シ得ズ。右中鼻道出血性茸腫ト診定。數日經過ヲ監視ノ上熱締係ヲ以テ該茸腫ノ絞斷ヲ行ヒシニ下甲介上縁ヨリ發生セシモノナルヲ確メ得タリ。

組織學の所見。表面ニハ結締織様被膜ヲ有シ一見肉芽腫トモ稱スベキ所見ヲ呈ス。即チ全視野ヲ通ジ圓形細胞ノ浸潤極メテ強ク。所々ニ出血竈アリ。且ツ毛細管ノ新生著明ニシテ。血管ノ多數ハ充血ス。

第八例 大西某。23 歳男子。

家族歴上著變ナク。昭和9年1月。左鼻茸ナル診斷ノ下ニ手術ヲ受ケタル事アル外著患ヲ知ラス。

現病歴。10年3月頃ヨリ鼻閉。鼻汁過多及ビ左鼻出血アリ。放置セシニ漸次増悪ノ兆アルヲ以テ同年5月8日需診。

局所所見。左右鼻腔ニハ粘液様膿汁ヲ認メ。鼻粘膜ハ一般ニ腫脹ス。左鼻腔ノ大部ハ紫赤色ノ茸腫ニ充サレ。探診ニヨリ出血シ易ク検索ニ困難ヲ覺エタレドモ。辛ジテ中鼻道ヨリ發生セル事ヲ確メ得タリ。

診斷。處置。兩慢性上顎竇炎兼左出血性鼻茸ト診定。先ヅ茸腫ノ切除ヲ行ヒ。次デ上顎竇炎ノ根治手術ヲ施行セリ。摘出セシ茸腫ハ示指頭大ニシテ有莖性ニ發生セシモノナリキ。

組織學の所見。表面ハ重層圓柱上皮ヨリ成リ。基質ノ一部ハ粗鬆ナル結締織。他ノ部ハ密ナル結締織ニシテ毛細管ニ富ム。所々ニ出血竈ヲ認メ。該附近並ニ血管周邊ニハ「ヘモヂェリン」ノ沈着著明ナリ。圓形細胞ノ遊出ハ概シテ強カラズ。即チ全體トシテ纖維腫ノ所見ヲ呈スルモ血管ニ富ム。

第九例 堀田某。33 歳男子。

既往歴上特記スベキ事項ナシ。

現病歴。約1ヶ月前突然。右鼻出血アリシモ壓迫ニヨリ直チニ止血セリ。然ルニ其後右鼻腔ニ痂皮ノ形成著シキヲ以テ指頭ニテ除去セシニ中隔側ニ腫物ノ發生ヲ氣付キタリ。放置セシニ該腫物ハ次第ニ増大ノ兆アリ。出血モ亦加ハルヲ以テ。10年9月29日需診セリ。

局所所見。左鼻腔ハ正常。右中隔キーゼルバッハ氏部位ニ小指頭大ノ有莖腫アリ。赤桃色ヲ呈シ柔軟ニシテ觸診ニヨリ出血シ易シ。

診斷。處置。右中隔出血性鼻茸ト診斷。即日切除ヲ行フ。

組織學の所見。血管纖維腫ト考ヘラル、モノニシテ表面ハ多層扁平上皮ヨリ成リ。基質ハ粗鬆ナル纖維組織ヨリ形成セラレ。且ツ其一部ハ粘液性變性ニ陥レリ。實質内ニハ新生血管。多少ノ腺組織ヲ認ムルモ圓形細胞ノ浸潤ハ目立たズ。且ツ所々ニ出血竈アリ。血管モ多クハ充血セリ。

第十例 花方某。17 歳女子。

家族歴。既往歴上特記スベキモノナシ。

現病歴。昨年10月初メ頃ヨリ左鼻閉アリ。11月頃ヨリ混血性鼻漏加ハリシモ放置セシニ本年ニ入り左鼻出血ヲ見ルニ至レリ。依テ10年1月10日需診。

局所所見。右鼻腔ハ常。左鼻腔ハ赤褐色ノ腫瘍ニヨリ充サル。塗藥ニヨリ容易ニ出血ス。腫瘍ノ表面ハ凹凸アリテ後鼻鏡検査ニヨリ中甲介下縁ヨリ廣基性ニ發生セルモノナルコトヲ知レリ。

診斷。處置。左中甲介鼻茸ナル診斷ノ下ニ中甲介ノ一部ト共ニ小指頭大ノ茸腫ヲ切除ス。

組織學の所見。表層ノ一部ハ結締織性ノ被膜

ヲ有スルモ、大部分ハ之ヲ缺除シ、視野ノ半分ヲ占ムル程ノ大出血竈アリ、所々ニ認メラル。血管モ悉ク充血ス。特異ナル所見ハ其血管内被細胞ハ完全ナレドモ血管外側ニ於ケル細胞ノ増殖ニシテ、仔細ニ觀察スレバ、該細胞ハ赤血球ヨリ稍々大ニシテ略々圓形ヲ呈シ、密ニ被膜狀ニ集團シ「ヘマトキシリン」ニ好染ス。血管ヲ直角ニ切斷セル所ハ血管ヲ中心トシテ放射狀ニ排列ヲナセルヲ見ル。

第十一例 鈴木某、39歳男子。

家族歴並ニ既往歴、特別ナル事ナシ。

現病歴。昭和9年7月頃ヨリ左側ノ鼻漏アリシモ放置スルニ翌10年5月中旬ヨリ時々鼻出血、鼻閉アリ。6月5日外來ニ來タル。

局所所見。耳、咽喉頭、右側鼻腔ニ著變ナシ。左側鼻腔、中、下甲介其モノ、肥大ハナケレドモ側壁ノ鼻腔内ニ壓出セラレシ感アリ。鼻腔ヲ塞グ。中鼻道ニ膿汁ヲ認ム。頬部、齒齦、口蓋ニハ異狀ナシ。上顎ニ於ケル腫瘍ヲ疑ヒ、「レントゲン」寫眞ヲ撮影セシニ上顎竇内ニ一致シテ薄キ陰影ヲ認ム。手術ヲス、メシモ肯ゼズ。其後10月16日ニ至リ再び來院。鼻漏ト鼻出血ノ増加ヲ訴ヘ、手術ヲ需ム。

診斷、處置。左上顎竇腫瘍ヲ疑ヒ、同月22日デルケル氏法ニ依リ手術ヲ行フ。上顎竇粘膜ハ中等度ノ肥厚アリ。竇内ニハ小兒拳大ノ腫瘍アリテ自然口附近ヨリ有莖性ニ發生セルヲ知り、之ヲ除去。型ノ如ク手術ヲ終ル。摘出セン腫瘍ノ大サハ1.6cm×3.7cm×3.5cmニシテ表面ハ暗赤色、比較的平滑ニシテ厚サ約0.1cmヨリ1.0cmニ亘ル囊狀ヲナシ中ニ凝血ヲ充ス。

組織學的所見。血管腫ト稱スベキ所見ニシテ出血竈及ビ血管新生ノ像目立テリ。周邊ニハ結

締織増殖、血色素ノ沈着著シ。圓形細胞ノ浸潤ハ全視野ヲ通ジテ認メラル、モ一般ニ著シカラズ。

第十二例 阪本某、11歳女子。

現病歴。約6ヶ月前ヨリ頭重、鼻漏、時々左鼻出血アリ。放置セシニ漸次増悪ノ兆アルヲ以テ10年4月28日需診。

局所所見。左下甲介ハ萎縮シ、爲ニ兩鼻腔ハ稍々廣シ。兩中鼻道後方ニハ粘液性膿汁ヲ認メ、且ツ左中隔キ氏部ニ小豆大略々球狀、深紅色ノ腫瘍アリテ出血シ易シ。

診斷、處置。兩慢性上顎竇炎兼左出血性中隔鼻茸ト診定シ同年5月18日茸腫ノ切除ヲ行フ。

組織學的所見。表面ノ一部ハ重層圓柱上皮ニ被ハル、モ大部分ハ之ヲ缺キ、基質ハ或ハ密ニ或ハ粗ナル結締織ヨリ成リ、所々ニ出血竈アリ。周邊ニハ各種白血球ノ浸潤強キモ特ニ「エオジン」嗜好細胞ノ游出目立テリ。腺組織ノ増殖モ亦著明ニシテ毛細管ノ多クハ充血ス。血色素ノ沈着モ所々ニ認メラル。要スルニ本例ハ出血並ニ圓形細胞ノ浸潤ヲ主トシタル像ニシテ肉芽腫ト考ヘラルベキモノナリ。

三、總括並ニ考案

前記ノ12症例ハ、其發生部位、茸腫ノ大サ等一樣ニ非ズト雖、臨牀上ニハ齊シク出血性鼻茸ト稱セラルベキモノナリ。依テ余ハ之等各例ニツキ比較考案シ、之ヲ總括スル事次ノ如シ。

(1) 患者ノ性別、年齢。

12例中、女性ハ4例ニシテ他ノ8例ハ悉ク男子ナリ。從來ノ統計ニ依レバ本症ハ男性ヨリモ女性ニ頻發スルモノ、如クハスラウエルハ44例中33例(75%)ニ於テ、平川氏ハ169例中97例

(57%)＝於テ女性ヲ舉ゲタレドモ之等ノ統計＝ハ相反ス。由來出血性鼻茸ハ比較の若年ナル婦人＝多ク、且ツ時トシテ妊娠中ノ経過＝發來スルノ事實ヨリ、本症ト代償性出血及ビ妊娠トガ何等カノ關係ヲ有スルカノ如ク云フ學者アリ。余ノ症例中＝モ妊娠中＝發病セシモノ1例ナルモ(第6例記事参照)單＝1例ノミノ經驗ナルヲ以テ且ツ又余ノ例＝於テ12例中8例ノ男性ナリシ點ヨリシテ本症ノ一般的原因トシテ妊娠或ハ代償性出血ガ關與セシヤ否ヤハ斷ジ得ザル次第ナリ。患者ノ年齢ハ最大68歳ヨリ最少11歳＝亙リ老若ノ別ナク本症＝罹患スルモノナル事ヲ如實＝物語レリト雖、別表＝示セルガ如ク30代、20代＝多キハ從來ノ統計＝略ニ一致セリ。

患者ノ年齢

60代	50代	40代	30代	20代	10代	計
1	0	1	3	5	2	12

(2) 茸腫ノ發生部位。

患側ハ從來ノ統計ノ如ク、余ノ場合＝在リテモ左側多數ヲ占メ(12例中9例ハ左側ナリ)タレドモ、本事實ガ果シテ茸腫發生原因トシテノ外傷説＝根據ヲ與フルモノナルヤ否ヤ＝關シテハ遠ニ同意シ難シ。試ミ＝之等患者ノ職業ヲ調査スル＝大多數ハ倅給生活者＝シテ特ニ外傷ト密接ナル關係ヲ有スト思考セラル、職業者ハ比較の少數ナレバナリ。

次＝茸腫ノ發生部位＝關シテハ、中隔ハ斷然多數ニシテ12例中ノ半数即チ6例ヲ占メ、甲介(3例)、中鼻道(2例)、上顎竇(1例)ノ順位ニシテ、甲介＝在リテハ、下甲介1例、中甲介2例ナリ。之ヲ平川氏ノ統計ト比較スル＝同氏ノ

症例202例中、中隔＝發生セシモノハ128例＝シテ同症例ノ過半数＝當リ、略々余ノ頻度モ之＝類似スル事ヲ知レリ。

又發生狀況ヲ觀ル＝12例中10例ハ有莖性ニシテ廣基性＝發生セシモノハ僅ニ2例ノミナリキ。即チ本症ハ有莖性＝發來スル事多シトノ從來ノ統計＝合致スルモノナリ。

(3) 發病ヨリ需診マデノ経過

並＝茸腫ノ大サ。

余ノ12例＝就キ、患者ノ初メテ自覺症ヲ意識シタル時期ヲ以テ發病年月トシテ發病ヨリ需診マデノ経過日數ヲ、並＝茸腫ノ大サヲ調査スル＝次表ノ如シ。(次頁参照)

即チ茸腫ノ大サハ小指頭大ヨリ拇指頭大＝及ビ其経過日數ハ最短1ヶ月ヨリ最長1ケ年＝亙リ、極メテ多種多様ニシテ且ツ経過日數ト茸腫ノ大サトノ間＝ハ何等關係ナキヲ知レリ。唯一言スベキハ、経過月數1ケ年＝及ベル3症例ハ共＝慢性副鼻腔炎ヲ併發セシモノニシテ、患者ノ稱スル發病期ガ果シテ茸腫ノ發生ヲ意味スルヤ、又、副鼻腔炎ノ發病ヲ意味スルヤ判斷＝苦シムモノニシテ、從テ平均経過月數ハ實際上＝於テハ、遙カ＝短キモノナルニ非ザルカ。

想フ＝素人ハ出血＝對シテハ醫家ガ考フ以上＝恐怖ヲ有スルモノナルヲ以テ、本症＝在リテモ出血ガ現ハレテヨリ醫ヲ訪レルマデノ期間ハ比較的短カシト考フルガ至當ナルベシ。

尙ホ需診時＝於ケル腫瘍ノ大サヨリ按ズル＝茸腫＝共通ナル鼻閉、鼻出血等ノ症狀ハ茸腫ノ大サガ小指頭大以上＝達シテ初メテ著明トナルモノ、如ク、夫レ以下ノ大サ＝在リテハ、餘リ患者ノ注意ヲ惹カザルモノト考ヘラル。

患者氏名 男女別・年	年齢	発病ヨリ マデノ 需診時 經過日数	茸腫ノ大サ	備 考
島 根 某 ♂ 26 歳	某 歳	約 1 ケ 年	小豆大ヨリ小指頭大	多發性ニシテ 8 個
田 村 某 ♂ 32 歳	某 歳	2 ケ 月	大豆大	單 發 性
萩 原 某 ♂ 22 歳	某 歳	4 ケ 月	大豆大小豆大 各 1	多 發 性
秦 某 ♂ 68 歳	某 歳	5 ケ 月	示指頭大 (1.2×1.8×1.0)	單 發 性
宮 田 某 ♂ 21 歳	某 歳	1 ケ 年	櫻 實 大	〃
三 好 某 ♀ 21 歳	某 歳	2 ケ 月	拇 指 頭 大 (2.6×1.6×1.2)	〃
杉 野 某 ♀ 26 歳	某 歳	4 ケ 月	示 指 頭 大	〃
大 西 某 ♂ 23 歳	某 歳	2 ケ 月	〃	〃
堀 田 某 ♂ 33 歳	某 歳	1 ケ 月	小 指 頭 大	〃
花 方 某 ♀ 17 歳	某 歳	3 ケ 月	〃	〃
鈴 木 某 ♂ 39 歳	某 歳	約 1 ケ 年	小兒手拳大 (1.6×3.7×3.5)	〃
阪 本 某 ♀ 21 歳	某 歳	6 ケ 月	小 指 頭 大	〃
			平均經過月数 5.5 月 強	多 發 性 2 例 單 發 性 10 例

(4) 組織學の所見ノ總括。

12例ニ於ケル組織學の所見ヲ要約スレバ次ノ如シ。

島 根 血管ニ富メル纖維腫
田 村 肉芽腫
萩 原 血管腫
秦 血管膜
宮 田 血管腫
三 好 血管纖維腫
杉 野 血管ニ富メル硬性纖維腫
大 西 纖維腫
堀 田 血管纖維腫
花 方 眞性腫瘍(外皮細胞腫)
鈴 木 血管腫
阪 本 肉芽腫

即チ純粹ナル血管腫ニ數フベキモノ 4 例。纖維腫ニ屬スベキモノ 3 例。同混合腫 2 例。外皮細胞腫 1 例ニシテ腫瘍ニ非ズシテ炎症性ノ肉芽腫

ト考フベキモノ 2 例ナリ。要之。其臨牀症狀ノ略ニ同一ナルニ拘ラズ。之ガ組織學の所見ハ千差萬別ナリト雖モ。血管腫ニ屬スベキ腫瘍ノ大多數ヲ占ムル點。從來ノ統計ト相一致セルヲ知レリ。茲ニ特記スベキハ外皮細胞腫ノ 1 例存セシ事ナリ。本症ハ 17 歳ノ女子ニ見ラレタルモノニシテ臨牀的ニハ他ノ症例ト殆ンド大同小異ノ症狀ヲ示セシモノニシテ。其經過ノ永キ割合ニ其腫瘍ノ小ナリトヲ異ニセシ次第ニテ。出血ノ程度ノ如キモ特ニ目立タザリシモノナリ。即チ本例ノ眞正腫瘍ナリシ事ハ。其組織學の檢索ニヨリテ偶然ニ確メラレシモノニシテ臨牀的ニハ全ク他ノ出血性鼻茸ト區別シ得ザリシモノナリ。由來鼻腔ノ良性腫瘍(所謂茸腫ヲ除ク)ハ一般ニ稀有ノモノト考ヘラレタレドモ仔細ニ其組織ヲ檢索スレバ單ニ出血性鼻茸トシテ葬ラルル症例ノウチニ眞性腫瘍ノ一部ガ包含セラルモノニ非ザルカ。

松山論文附圖

所謂出血性鼻茸ノ十二例ニ就テ

Fig. 1. 第1症例

Fig. 2. 第2症例

Fig. 3. 第3症例

Fig. 4. 第4症例

Fig. 5. 第5症例

Fig. 6. 第6症例

松山論文附圖

所謂出血性鼻茸ノ十二例ニ就テ

Fig. 7. 第7症例

Fig. 8. 第8症例

Fig. 9. 第9症例

Fig. 10. 第10症例

Fig. 11. 第11症例

Fig. 12. 第12症例

四. 結 論

余ハ 12 例ノ所謂出血性鼻茸ヲ臨牀的並ニ組織學的ニ檢索シテ次ノ如ク結論セントス。

1. 12 例中女性 4 例ニシテ他ハ悉ク男性ナリ。

2. 患者ノ年齢ハ最小 11 歳ヨリ最大 68 歳ニ亘レリト雖。過半数ハ 30 代及ビ 20 代ノモノナリ。

3. 茸腫ノ發生ハ左側 9 例。右側 3 例ニシテ中隔ニ發生セシモノ 6 例。下・中甲介 3 例。中鼻道ニ原發セシモノ 2 例。上顎竇ニ發生セシモノ 1 例ナリ。

4. 茸腫ハ 2 例ヲ除キ單發性ニシテ其大サハ小兒手拳大ヨリ小豆大ニ亘レリト雖。之ガ發生ヨリ需診マデノ期間ハ必ズシモ茸腫ノ大サニ比例セズ。

5. 12 例中鼻腔。副鼻腔ノ炎症疾患ヲ合併セルモノ 5 例ニシテ症例ノ過半数ニ達セズ。由是觀之本疾患ノ發生ガ鼻腔。副鼻腔炎ト何等カノ因果關係アリトハ遽ニ斷ジ難シ。

6. 茸腫ノ組織學的所見ハ血管腫 4 例。纖維腫 3 例。血管纖維腫。肉芽腫各 2 例ニシテ。他ニ血管外皮細胞腫ト考ヘラル、モノ 1 例ヲ數ヘタリ。

擲筆ニ臨ミ。御懇篤ナル御指導。御校閲ヲ賜ハリタル
恩師。名大阿久根教授。海軍醫校吉田教官ニ深謝ス。

主 要 文 献

- 1) Baurowicz, A.: Arch. f. L. Bd. 13, 1908.
- 2) Denker u. Kahler: Handb. d. Hals-Nasen-Ohrenheilk. Bd. 2, 1926.
- 3) 古武, 中村: 東京醫誌. 第2957號.
- 4) 林義雄: 耳鼻. 第5卷, 第6號.
- 5) 平川武三郎: 日耳鼻全書. 第4卷ノ2.
- 6) 今井龍雄: 大日耳鼻. 第39卷, 第7號.
- 7) 石

- 神寛: 愛知醫會誌. 第42卷, 第2號.
- 8) 岩田逸夫: 大日耳鼻. 第41卷, 第3號.
- 9) 黒田顯: 大阪醫誌. 第1卷, 第9號.
- 10) Sakai: Arch. f. O. Bd. 85, 1911.
- 11) Schadwald, O.: Arch. f. L. Bd. 1, 1894.

(原稿到着ニ昭和11. 8. 7)